

コメ作り 新時代開く

1年で市販価格が2倍超に跳ね上がったコメ。主な原因は生産不足で、農家の高齢化や猛暑などの気候変動に注目が集まる契機にもなった。日本の主食を取り巻く環境変化にどう向き合うか。コメの未来に夢をかける生産者の取り組みに迫った。

「初冬直まき」で省力化

初冬の田んぼに種もみをまく。そんなコメ作りの常識を覆す「初冬直まき」に、八幡平市野駄の農業法人「かきのうえ」(立柳慎光代表取締役)が挑んでいる。雪の下で越冬させ、春の雪解けとともに発芽させる新技術だ。育苗や田植えの工程を省き、農繁期の労働負担を大幅に軽減できることから、担い手不足に悩む生産現場の「切り札」として注目されている。

八幡平・農業法人「かきのうえ」

年)の2・8倍という急拡大だ。だが、育苗ハウスは旧来の3棟のみで、苗の供給能力は16畝分が限界だった。「ハウスの増設には資金が必要。農地を広げると、人も機械も追いつかない。それでも、地域の田んぼは守りたい」。地域農業の未来を背負う立柳代表(46)が直面したジレンマを打破したのが、この新技術だった。20年に20㍏で試験導入。「手応えを感じた」と語る立柳代表は、25年産で9・8畝に拡大した。多収品種の「つきあかり」の収量は、条件の良い圃場で10㍏当たり570㍏を記録し、通常の移植栽培と遜色ない成果を上げている。春の乾いた田んぼに種もみを直接まく栽培技術も31畝で取り入れ、作業時期の分散を図った。

ね、発芽率を維持するための種もみの保管方法やコーティング技術などの知見を積み重ね、普及を目指している。15年に青森県の1経営体で導入され、25年には本県や新潟県など約40経営体へと広がった。日本人の主食であるコメ。その生産現場は今、転換期にある。「高齢化や機械の老朽化で離農のペースは想像以上に早い」と立柳代表は危機感を募らせる。農地の受け皿となる大規模経営体にとって省力化技術は生命線だ。「直まき栽培は、面積を拡大していくための切り札となる」と期待は大きい。

この冬も、雪をたたえた岩手山の麓の田んぼにまかれた種が、春の芽吹きを待っている。昨年は、高校を卒業した長男恒河さん(19)が、挑戦する父の背中を追って家業に入った。雪深い岩手の地で、持続可能なコメ作りのモデルを切り開いていく。

地域の田んぼ 守りたい

初冬直まきは、寒さから守るための特殊なコーティングを施した種もみを晩秋から初冬に直接田んぼにまく栽培手法。最大の特徴は、春に集中する作業を農閑期へ分散できる点だ。従来の育苗、代かき、田植えという春の重労働が不要になり、コスト削減も図ることができる。

同社は従業員と家族計6人体制。地域の高齢化に伴い離農者の農地を引き受け、2025年産の作付面積は58・7畝に達した。法人化当初(20



初冬にまいた種もみが眠る田んぼに立つ立柳慎光代表取締役。地域農業の未来を見据える＝八幡平市平館